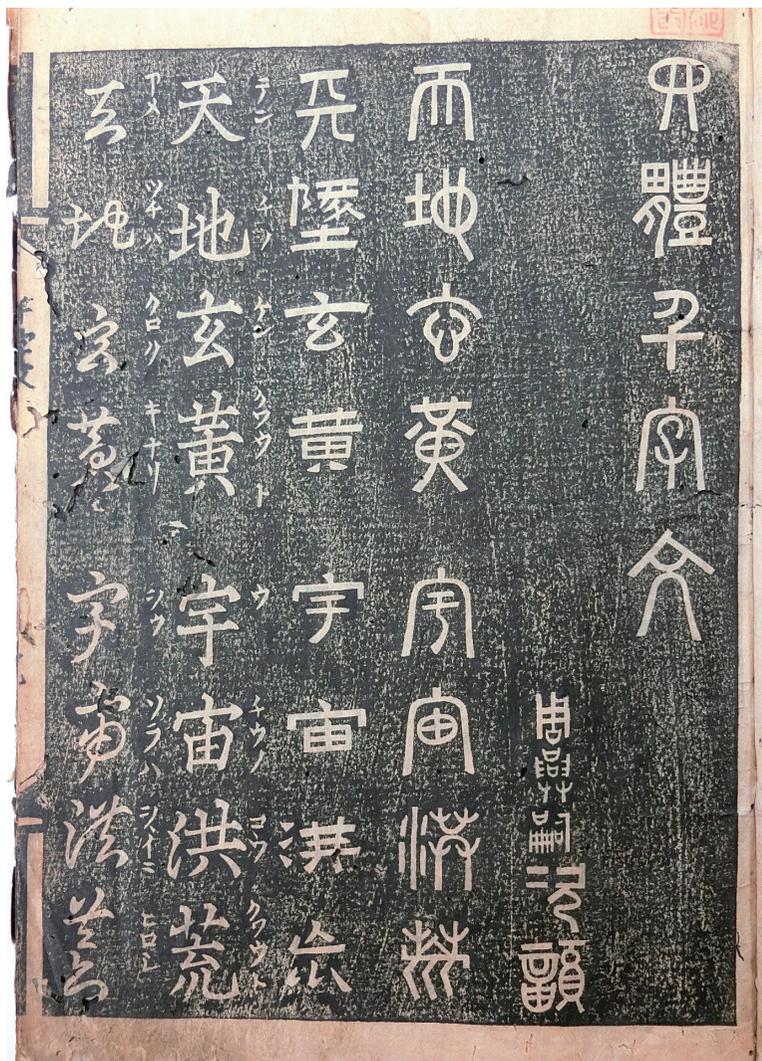


漢字の成立



* 服部家文書15 「四体千字文」

解説

「漢字」には甲骨文字（亀の腹甲や牛・鹿の肩甲骨に刻まれた殷代の文字）や金文（青銅器の表面に鑄込まれた、あるいは刻まれた殷・周の文字）を経て篆書（てんしよ。周から戦国時代に公的に使用された書体）、隸書（れいしよ。秦から漢の時代に調えられた書体）、それらを簡略に崩した草書、楷書（南北朝から隋・唐にかけて標準となった書体）などがつくられました。漢字は儒学・仏教・土木技術・機織りなどとともに、渡来人によってわが国にもたらされたと考えられています。

「千字文」は中国で6世紀に成立した千文字の韻文で、「天地玄黄」から「焉哉乎也」まで、天文・地理・政治・経済などの森羅万象を、同じ文字を使わずに4字を1句とする250個の短句で表しています。

以来、書道の手本などとしてさまざまな千字文が作られましたが、上の写真は、右から篆書・隸書・楷書・草書で千字文を並べた「四体千字文」です。

* 当館にはこのほか、「三体千字文」（木津屋家文書234）や「画引十體千字文綱目」（吉野家文書158）、「世話千字文」（吉田樟堂文庫2727）、「行草千字文」（山田家文書（徳山市）和漢110）など多数の「千字文」があります。